

イネいもち病に対するトルプロカルブを含む育苗箱施用剤の 防除効果

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

鳥取県ではストロビルリン系薬剤耐性イネいもち病菌の発生により、2015年より主力の育苗箱施用剤であったオリサストロビン剤の使用が控えられている。このため、現在では県内全域で抵抗性誘導型の育苗箱施用剤のみが使用されている。しかし、本病の防除対策を講じる上では、作用機構が異なる薬剤を複数用いる必要がある。そこで、別の作用機構を持った新規育苗箱施用剤の葉いもち防除効果を検討した。

(2) 情報・成果の要約

イネいもち病（葉いもち）に対して、トルプロカルブを含有する育苗箱施用剤は、移植当日処理（50g/箱）により高い防除効果が認められる。

2 試験成果の概要

(1) 平坦地における防除効果

新規成分トルプロカルブを含有する育苗箱施用剤の移植当日処理（50g/箱）は、イソチアニル剤およびプロベナゾール24%剤と同等の高いいもち病（葉いもち）防除効果が認められた（図1）。また、実用上問題となる薬害も認められなかった。

(2) 山間地における防除効果

トルプロカルブを含有する育苗箱施用剤の移植当日処理（50g/箱）は、イソチアニル剤と比較して同等以上、プロベナゾール24%剤もしくは同20%剤と比較して同等の実用的ないもち病（葉いもち）防除効果が認められた（図2）。また、実用上問題となる薬害も認められなかった。

3 利用上の留意点

(1) 本情報の普及対象は、鳥取県下全域とする。

(2) トルプロカルブを含有する育苗箱施用剤には9%製剤と4%製剤があるが、本情報は9%製剤の試験結果であり、4%製剤については未検討である。

(3) 2020年1月15日現在、トルプロカルブを9%含有する育苗箱施用剤は、他の殺菌殺虫成分が異なる4剤（ゴウケツバスター箱粒剤、ハイパーキック箱粒剤、ツインキック箱粒剤、トリプルキック箱粒剤）が農薬登録されている。したがって、薬剤の選択の際には登録内容をよく確認して地域に適した薬剤を使用するとともに、必要に応じて追加防除を行う。

(4) 穂いもちについては、既存の育苗箱施用剤と同様に本田散布剤等による予防防除を行う必要がある。

(5) 薬量が不足すると防除効果が低下するため、規定量を均一に散布する。

[具体的データ]

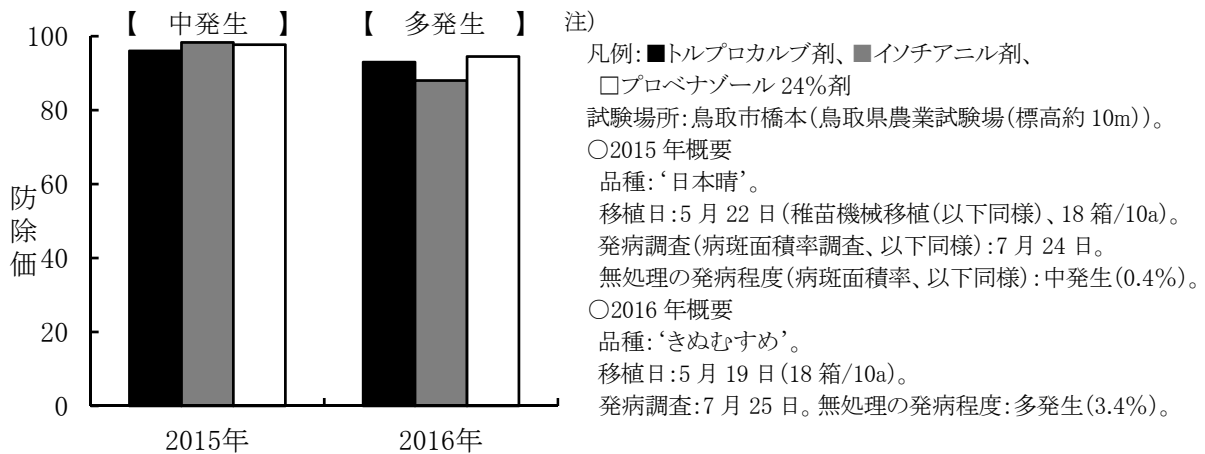


図1 トルプロカルブを含む育苗箱施用剤のイネいもち病(葉いもち)に対する防除効果(平坦地)

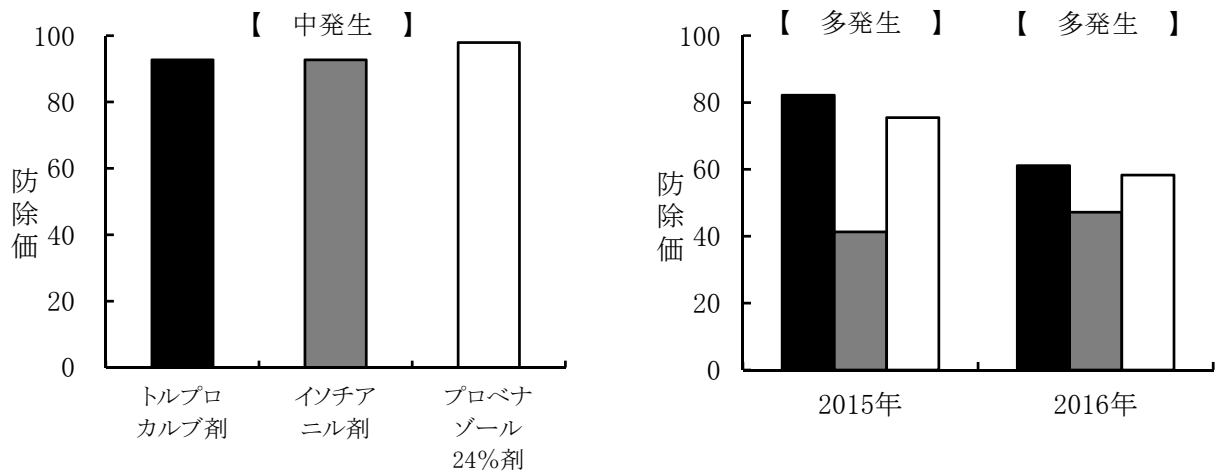


図2 トルプロカルブを含む育苗箱施用剤のイネいもち病(葉いもち)に対する防除効果(山間地)

左図 注)

試験場所:智頭町真鹿野(標高約 350m)。
 品種:‘コシヒカリ’。
 移植日:2016 年 5 月 9 日(18 箱/10a)。
 発病調査:7 月 25 日。
 無処理の発病程度:中発生(0.96%)。

右図 注)

凡例: ■トルプロカルブ剤、■イソチアニル剤、□プロベナゾール 24%剤(2015 年); 20%剤(2016 年)。
 試験場所:三朝町福山(標高約 550m)。
 ○2015 年概要
 品種:‘コシヒカリ’。移植日:5 月 28 日(16 箱/10a)。
 発病調査:7 月 22 日。無処理の発病程度:多発生(3.3%)。
 ○2016 年概要
 品種:‘コシヒカリ’。移植日:5 月 27 日(16 箱/10a)。
 発病調査:8 月 2 日。無処理の発病程度:多発生(3.6%)。

4 試験担当者

環境研究室 研究員 宇山啓太
 室長 長谷川優